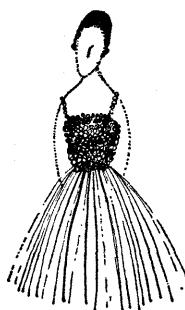


## 十一年目のアメリカ



江波 謙子

私は、この夏、十一年ぶりにアメリカに暮らした。

今さら見聞記など書く気には、全くなれないのだが、編集部の方に勧められるままにペンをとることになってしまった。

二度目の滞在を終え、私の場合両方とも特定の限られた場所での生活体験であり、観光訪問旅行とは、ほど遠いことをしみじみ感じている。第一回は、留学生としてペンシルヴァニア州、ステイトカレッジに二ヵ年、今回は、ニューヨーク州ロングアイランドにあるブルックヘブン国立研究所のアパートメント群に三十六日間暮らした。「我が青春のボストン」ならず、我

が青春のステイトカレッジを訪れたのが、今回唯一の旅行らしい部分であった。まず第一に、十一年間もつかつていなかつた英語が、心配した程でもなく、下手ながら次々と出てくるのは、まことにありがたかった。不思議なことに、私は日本語をしゃべっている限り、かなりウエットな人間であるのに、英語をつかい始めるや否や、明るく、はきはきとし、冗談もよく出るようになる。言語の構造の為か、文化の違いによるものか分らない。あまり、井戸端的な事は書かないよう努めなければならないのだが、やはり、どうも話はそこに落ちつきそうである。

八月初旬、休みを利用して母校ベンシルヴァニア州立大学のあるステイトカレッジへ向った。七時間のドライブである。全くの蛇足になるが、今回私の家族が共であったのは、まことに奇妙な感情の体験であつた。できれば、ひとりしみじみと十一年前の自分にもどりたいと願つたが、それは不可能であつた。恩師ハリス先生 (Dale B. Harris) の家に着いてようやく、

昔の自分が甦つてきた。最初に、ハリス先生のことから報告しよう。(ハリス教授は、フルブライト交換教授として、一九六八年にお茶の水女子大学を中心にして、半年間日本に滞在された心理学者) ハリス先生は、現在ベンシルヴァニア州立大学を定年退官されてゐる。しかし、いくつかの講義(主に Humanistic Psychology)と、学生の論文指導を行つてゐる。僅かに毛髪が白くなつたを除けば、ほとんど十一年前と変わつてないようみえる。しかし、自分では、話をしながら時々人の名前とか、物の名前を思い起こせなくなるのは、年のせい (aging) だといつてゐる。殊に六人目の孫の名前などは、夫人に何度も忘れてしまうらしい。退官して変わつたことは、所属学

会の数が減つたこと(これは、学会費を払い続けるのが大変だから)と、これまで学会の要職についていたので、いつも最新の情報が入つてきただが、これからは今までのようにはゆかないということである。この事について、私に今まで通り資料を分けてあげられないけれど、必要なものがあれば何なりと申し出るようとの事であった。

すでに十年以上も夫人と二人きりの、あの大きなレンガ造りの家には、私の前後に何人も学生が暮らした。オランダのマリアンヌは、現在母国で英語教師をして、昨夏は息子二人を連れてカナダの別荘を訪れている。私の後は、我が尊敬すべき先輩の大戸美也子さん、イギリス人の女子学生が暮らし、現在はアメリカ人学生が二人同居している。私はずい分甘えた生活をしてしまつたが、私を除く他の学生達はすべてまじめで実によく勉強しているようだ。朝食や夕食のひととき、この学生達と学問のこと、キャンパスのこと等を話しながら食事をする時の先生のきめきりと輝く鋭い目がすばらしい。学生にとつても知識の豊庫のような先生と、自由な会話を楽しめるので、食事以上に貴重

な経験である。心理学専攻の学生に、何故この家に住むようになったかを尋ねると、次のように答えた。彼女は、ハリス教授の講義を聞く一人の学生であった。

先生の講義はとてもすばらしく、彼女達学生はみんなその講義を終らせたくない願っていた。オープンハウス（教授が学生達を自分の家に招くこと）の時、彼女は自分が五人きょうだいの一番上であることや、親に経済的負担をあまりかけないで勉強したいという事を話した折、彼女が先生の家で部屋代も食事代もなしで暮らす事が決ったという。

三回するのは大変なことだ。この老熟の教授が若い学生に話す内容はいくらでもあるに、毎回の講義をこの上なく大事にしているのだ。これが大学の人間のあらるべき姿かと、私も深く反省させられた。日本では週一回の講義なので、日本の大学だったらもう少し続けられるかも知れない事を私が言うと、「そうかも知れないね」とやさしく笑う。

昼間、私はギャンバスと本屋まわりをしたので、感じたことを話してみた。そこで、再認識したのがアメリカ人の人々が一般的に新しいものが好きで、同時に忘れるのも大変上手であるということである。スポーツ博士など過去の遺物であり、十年前日本にも紹介されたベライター（Bereiter）やエンゲルマン（Engelman）もとうに忘れ去られているというのだ。「十年経てば、皆忘れ去られる。それがこの国だよ」という。こんな話は、今が初めてではない。第一回目の渡米の時、アンダーソン（J.E. Anderson）のことも同じようにいっていた。アンダーソンが生前、生活のすべての無駄をカットし、仕事ひとつじに生きた活躍期から十年、彼が亡くなると彼の仕事も忘れ去られた

という話である。そういえば、ステイトカレッジのキャンパスも変わった。私の留学時の友人で、同時に私の勉強のルーバーやおいたフラン(Francine Deutsch)は、少し前「Life-Span Individual and Family development」による本を出版し、大学で講義をこなす。町には、彼女の講義をうたどりう若者が、本屋でアルバイトをしていた。「Life-Span」は今や彼らの最大の関心分野であるらしい。私の働いた附属ナースリースクールは、現在デイ・ケアセンターのような形で運営されていた。十一年は、そんなに長い年月ではない。しかし、その間に大学や人々はどうしてこんなに変わってしまうのだろう。これが私の率直な疑問であった。

私のめの一人の恩師、ド・リシボイ先生(Vladimir de Lissivoy)についても、少しお話をさせていただい。ド・リシボイ先生は、つい先日(七月)、大学を定年退官された。足の手術をして退院した翌日お会いするにとになった。髪はほとんど白くなつたが、上品でヨーモアたっぷりの表情は少しも変わっていない。「く

ンスティュー(Pennsylvania State Univ.)が、児童発達を学ぶ所ではなへだいだよ」。僕は「それが情ない気持で、「やは先生、どうがよ」のでしょうか。ロロンピアですか」と返した。そこでお聞きしたのが、現在アメリカで児童発達に熱心でよい研究をしてくる大学である。それいせ、Adelphi University, Purdue University, Mills College, Eastern Michigan University 等、どれも僕が分つた。

私が過去の仕事の中から、現在も大変に関心を抱いている教育の一重構造(保育において、教師のねらいに対する学習経験の内容のそれの意を表わす)という話すと頗るながら、最近読んだ論文の中から、  
「If you teach one thing, they (children) will learn the other thing」といふことを教へてゐる人がいたいと教えてくれた。十一年ぶりに訪れたにしては、あまりに短い逢瀬であった。三十六日の滞在を終えて海を渡る飛行機の暗やみの中で、何故かこの老恩師を想いながら、過去と未来を結ぶ空白の時間帯の中にいる自分を強く感じていたのである。(常磐学園短期大学)